

優秀賞

「線は点の集合」

白百合学園高等学校 3年 矢追 知花

裏庭にてありんこの行列発見。少年のようにしゃがみ込み、時を忘れてその小さな生物達の行動を見守った。多くのアリは白いかけらを担ぎ、せつせと前に続いている。たまに脱線して彷徨う子もいたが、上手く行列をみつけて帰って行った。一度立つて全体を眺めるとただ一本の線がそこにあるだけのように見えた。

線と聞いて必ず思い出すことが、中学生の数学の時間に先生が言った「線は点の集合」という定義だ。これを聞いたとき、自分にとつての新しい概念を理解できず、ノートの隅に様々な線をペンで引き、眺める角度や距離を変えてどうにか点を見つけ出そうと努力していたことを思い出した。それと同時に、高三になってもまだやるのが中学生の頃と変わっておらず、やはりこれが私だ、と自分を再確認でき心躍った。自分自身の人生を創造する今、小さなことでも自分らしさを見つけられたということは喜ばしいことなのだ。

先日、おばあちゃんが家に泊まりに来た。おばあちゃんが淹れる緑茶は特別で、御茶菓子と共にお茶を大切に飲みながらおばあちゃんと話をしている途中で、

「ちかちゃんは大人になつたら何したい?」
と尋ねられた。

「世界中の国々の人と友達になりたい。」

ある少女の壮大な夢は十年経つても変わりやしない。当時ぼんやりと霞んでいた輪郭は今やはつきりと縁取られてきた。

おばあちゃんは今の世界情勢に鑑みて心配そうにしていたが、私は実現できる日は直ぐそこにあると思う。一人一人の人間が離れて見えても実は線の一部となつて繋がっていると考えたら、地球の裏側にいる人もご近所さんのように思えるからだ。ありんこの行列と中学数学の「線は点の集合」に基づいてである。今は細い線であっても、皆が幸せに向かって同じ方向に向かった瞬間、それはそれは心強い、太い線になるだろう。